

パストラル・ポエムとしての ‘The Immortality Ode’¹⁾

山田晶子

序

子供への固執は W. ワーズワスの詩の重要なテーマである。‘We Are Seven’, ‘There Was a Boy’ やその他 *Lyrical Ballads* の多くの詩が、直接に子供を歌った詩としてすぐ思い出される。また子供時代を理想世界とする彼の人生哲学が表われている詩としては “My Heart Leaps up When I Behold” や ‘To the Cuckoo’ などが挙げられる。

ワーズワスの詩に登場する子供あるいは子供時代は常に理想化されているが、有名かつ難解な ‘Ode: Intimations Of Immortality From Recollections Of Early Childhood’²⁾ の第8連では、子供は “best Philosopher” (111) あるいは “Mighty Prophet” (115) と呼びかけられている。

なぜワーズワスはかくまで子供や子供時代に固執するのだろうか。一般に子供時代というものは、大人に人類の夜明けである黄金時代の、平和で静かで安らかなパストラル世界の雰囲気を思い出させるものであるが、それは大人がパストラル世界と対照的である、複雑で退廃的な人工の都市世界に埋没しており、その騒音の中で身心共に疲れ切って平安を求めさ迷っているからである。だから子供時代は大人の現実と比較して理想化され、人間の一生における黄金時代と思われる。特にワーズワスにとって都市は悪徳の象徴であり、‘Tintern Abbey’ のワイ河に代表される人間界と自然界の調和した情景は、彼の理想とする心象風景なのであるが、その理想世界は “these pastoral farms”³⁾ と述べられている。また *The Prelude* 第10巻では、自分の隠れ家を、変化することなく消え去ることのない “the nest of pastoral vales,”⁴⁾ “happy

fields I had grown up From childhood”⁵⁾ と述べている。世俗から隔った谷間の美しい世界は、ワーズワスにとってエデンの園と言える。彼にとって、このように空間的にパストラル世界として存在するものが時間的には子供時代である。D. Perkins はワーズワスの詩におけるパラダイスの住人としての子供を次のように述べている。

Wordsworth... tended to express the joy and peace felt in union with nature or God by calling such moments as experiences of “Heaven” or “Paradise.” Hence the child can be said to dwell in “Paradise.”⁶⁾

ワーズワスにとって子供の第一義は無垢あるいは墮落以前の自然状態であり、大人のそれは経験あるいは墮落した自然すなわち悪しき人工世界である。自然と人工の対立をテーマとする文学は広義のパストラルと解される。そして‘Immortality Ode’をパストラルのサブ・ジャンルの一つである「子供時代のパストラル」⁷⁾として考えてみるのがこの論文のテーマである。

‘Immortality Ode’は、作者の矛盾した思想と言葉の曖昧さを含むものとして難解とされており、これまでにその詩のテーマを(1)“growing up”とするものと(2)“growing old”とするものの互いに正反対の二つの論がある⁸⁾。前者の意見はL. Trillingに代表され、子供時代は人間が未熟な時であり、人間は大人になるにつれ完成していくものであるから、人が過去に固執することをよしとせず、そこから訣別するべきだというものである。そして‘Ode’ではこの訣別がなされていると考える。一方、後者の考え方は、子供時代こそワーズワスの原点であり、その時の神秘的な体験こそが何よりもリアルなものであるとする。そして大人になるにつれその神秘的な体験が感じられなくなり人間は生命力を失っていくものとして‘Ode’はその嘆きの歌であると考える。

だが‘Ode’をパストラル・ポエムとして読む時、今述べた二つの論の二者択一にはならない。‘Ode’には過去へ向かう意識と現在へ向かうその二つの

意識があるが、これら二つの意識は互いに矛盾するものではなく、詩人は飽くまでも現実と直面して詩を歌い上げており、現実から逃避しているのではない。彼が過去へ向かうのもまた現実へ戻るためなのであり、preparationとして解釈できる。そして詩人の現実→過去→現実という意識の動きは、悪しき人工→無垢の自然→矯正された人工というパストラルのパターンに一致する。このような一貫性が‘Ode’にはあると考えられる。

I

‘Ode’はその内容上、(1) 1—4連 (lamentation), (2) 5—9連 (meditation), (3) 10—11連 (consolation) の三部に分けられる。

パストラルの第一要素は過去へ意識を向けることであり、人工(経験)よりも自然(無垢)を憧憬することであるが、‘Ode’の1—4連でも詩人の意識は過去へ向かい、子供時代に見ることのできた“celestial light”(4)を大人になってからはもう見るができなくなったという喪失感と嘆きを述べている。詩人が想起しているのは、人間がまだ人工の介入がない墮落以前の自然状態にいる子供時代であり、そこでは子供は外的環境と調和した至福の状態にいてあたかもエデンの園にいるかのようである。第一部で詩人が憧憬する自然の季節は常春の印象を与える。一方、現在の彼は、外的環境との決定的な分離の意識、二度と昔の無垢の状態には戻れないのだという気持に打ち沈んでいる。ここに過去と現在、子供と大人の分裂意識がうかがわれる。

第1連のll. 1—5では子供時代の栄光が、ll. 6—9では現在の状態が、明瞭な対比において歌われている。かつては“celestial light”, “The glory and the freshness of a dream”(5)に包まれていると思われていた牧場、森、小川、大地が、現在では“common sight”(2)としか詩人の目に映らない。“celestial light”は後に“visionary gleam”(56)と言い換えられているが、“celestial,” “visionary,” “glory”という言葉は子供時代がパラダイスであったことを示す。それに比べて“common”という形容詞は何の面白味もないつまらない状態を思い浮かべさせる。大人になった現在が“common”

であるがゆえに子供時代はいっそう神化される。‘To the Cuckoo’においても子供時代は“visionary hours” (12), “golden time” (28) と表わされ、‘Nutting’ では、子供が木の実取りに行った日は“One of those heavenly days” (3) である。

“celestial light” は ‘To the Cuckoo’ のかっこう鳥, ‘To a Butterfly’ の蝶などと同じく幸福な子供時代の象徴であり、「夜でも昼でもかつて見たもの」と表わされていることから、物理的な光ではなくて精神的で想像上の光である。子供時代の栄光は“a dream”, “visionary” であり ‘To the Cuckoo’ でも “An unsubstantial, faery place” (31) と表わしてあるように、はかないものである。C. Brooks は, “apparelled” (4) という言葉は光が着物に似ていて地上では不自然であったから脱がされたのだと述べている。⁹⁾ かくしてパラダイスはついで去り、大人はその喪失感に苦しんでいる。この喪失感は一パストラルの条件である。

It is not now as it hath been of yore;
 Turn wheresoe'er I may,
 By night or day,
 The things which I have seen I can see no more.

(6-9)

第2連では、詩人は現在でも見られる虹、月、星、太陽などの天体 (celestial bodies) を次々に思い浮かべ、それらの美しさを歌うが、これらの天体の与える光は“celestial light” と言える。Brooks は A. Cowley が “Hymn to Light” においてバラの花を光として扱っているので、これらの天体にバラも加えてよいと述べている。¹⁰⁾ だが、これらの天体の発する光は第1連の“celestial light” とは明らかに異っている。なぜならこれらの天体の光は物理的、外的であるのに対し、第1連の光は精神的、内的光だからである。だから彼がいくつかの天体を思ってどんなに昔の“celestial light” を呼び戻そうと思っても無理である。かくして、彼の、視力に訴えて再び過去の栄

光を取り戻そうとする試みは失敗する。

But yet I know, where'er I go,
That there hath past away a glory from the earth.

(17—18)

この嘆きは第1連と同じトーンである。子供から大人になったことが、人間の内面のある墮落を意味している。

視覚に訴えて昔の栄光を取り戻すことに失敗した詩人は、第3連では聴覚に訴える。

11. 19—22 では喜ばしげな歌を歌う小鳥、太鼓に合わせて跳ね回る子羊とは異なり、詩人にだけ “a thought of grief” (22)¹¹⁾ が来たことを述べる。その時 “A timely utterance” (23)¹²⁾ が彼の悲しみを和らげ彼は再び力を得る。“No more shall grief of mine the season wrong” (26) と彼が言う時、意識的に悲しみを追い払おうという気持がある。彼は自然の発する様々な歓喜の音響を聞く。滝の轟き、山々を貫くこだま、眠りの野から吹き寄せる風などを。風はワーズワスの詩では生命力、創造力の象徴として様々な形を取って表われている。第3連の最後の2行で彼の願望は頂点に達する。

Thou Child of Joy

Shout round me, let me hear thy shouts, thou

happy Shepherd-boy!

(34—35)

羊飼いはパストラル世界の主人公であり、また自然と調和した人間としてワーズワスの理想とする人間のタイプである。

このように人間も自然と一体となって五月の心を持って地上全てのものが歓喜する様は、彼らの居る場所が常春のパラダイスのようである。

第4連では、詩人が自然の喜びに加わろうとする試みは、最初の6行目までは表面上成功したかのように思われる。

Ye blessèd Creatures, I have heard the call

Ye to each other make; I see
 The heavens laugh with you in your jubilee;
 My heart is at your festival,
 My head hath its coronal,
 The fulness of your bliss, I feel—I feel it all.

(36—41)

だが彼の試みは最後には挫折する。“oh evil day! if I were sullen” (42) という仮定法は、彼が現実には“sullen”でないということではなく、すでに彼の心の中に横たわっている“sullen”な気持を強いて押えようとして出て来た言葉なのである。金田真澄氏は“The fulness of your bliss, I feel—I feel it all”の行は、詩人が感じているのは他の生物の喜びであって彼自らの喜びではないと述べておられる。¹⁹⁾ ll. 45—49 の谷間で花を摘む子供達、母親の腕の中で跳ねている赤ん坊の描写はワーズワスの原風景とすべきものである。彼は、人間と自然が調和した状態にある時、人間を「子供」として表現し、自然はたびたび母として擬人化される。第4連の最後の7行は、どのような感覚的手段によっても回復されない喪失感を言明している。過ぎ去ってしまった何かのことを彼に告げる“a Tree” (51), “A single Field” (52), “The Pansy” (54) とは変容した詩人の化身ではないだろうか。これら三つのものは大文字で書かれ、喜びの自然から孤立して喪失感を帯びた唯一のものだから。そして最後に嘆きで第一部が締め括られる。

Whither is fled the visionary gleam?
 Where is it now, the glory and the dream?

(56—57)

この嘆きは楽園から追放された人間のそれである。

II

1—4連の喪失感を目や耳の感覚的手段によって回復できなかった詩人は、

5-9連で人間の一生について思索し、いかにして喪失感を回復すべきかに思い至る。

第5連で、我々の誕生は眠りと忘却にすぎず、我々の魂は栄光の雲をひきずりながら我々の故郷である神の国からこの世へやって来るのだが、魂は神の国を全く忘れていないと歌われている。この考え方はプラトンの靈魂先在説である。プラトンは、魂がこの世へ入る時感覚の暗い洞穴へ入ると考えたが、‘Ode’においても“Shades of the prison-house” (67) が人間の魂を包み込むと述べられ、プラトンの暗い洞穴に対応している。だから“the prison-house”はこの世であると同時に人間の肉体そのものを指すとも考えられる。地上は人間の本当の母親ではなく“homely Nurse” (82) であり、母親のような心で魂の故郷である“imperial palace” (85) つまり神の国を忘れさせようとする。“Nature’s Priest” (73) の自然こそ墮落以前の無垢の自然であり、魂の本当の母であり、故郷、すなわち神の国である。

ワーズワスによれば“celestial light”は人間が幼児の時最も壮麗で、少年、青年、大人と成長するにつれてだんだん弱まり、大人になった時には“the light of common days” (77) となって失われてしまう。“common”な光は、“homely”が“imperial”と対照的であるように、“splendid” (74) な“celestial light”と対照的である。人間が大人になった時は魂が完全に肉体に閉じ込められ“celestial light”は消滅し、暗闇の中になることになる。人間の成長の4段階は人類の歴史の4段階、すなわち黄金、銀、青銅、鉄の各時代に相当すると言えよう。また人間の一生は太陽の一日の運行にたとえられており、人間の誕生は日の出であり、彼は成長するにつれだんだん東から遠ざかる。そして真昼時が大人になった時であり、日没は彼の死である。

このようにワーズワスはプラトンの神話を用いているが、彼が後に I. Fenwick に ‘Ode’ について語っているように、彼はその神話を教義としてではなく、詩的手段として利用しているにすぎない。彼は、魂の先在説は聖書には述べられていないが、“the fall of Man”と類似しているため、多くの国民の信条になった、また古典文学を知っている人々にはプラトン哲学の要素と

して知られていると述べている。そして彼は何よりも ‘Immortality of the Soul’ について詩を書きたかったために靈魂先在説の考えを捉えたのである。¹⁴⁾ 彼は神の永遠性を熱烈に求め、魂の先在状態を人間がエデンの園にいた時と関連づけている。子供はほとんど魂と同一と考えられ、それは肉体の苦勞を知らない永遠界、すなわちパラダイスに住んでいると考えられる。ワーズワスは Mrs. Clarkson にあてて書いている。

The poem rests entirely upon two recollections of childhood, one that of a splendour in the objects of sense which is passed away, and the other an indisposition to bend to the law of death as applying to our particular case.¹⁵⁾

「感覚の対象物の光輝」は ‘Ode’ の “celestial light” を指す。また「死の法則に屈したくないこと」は、子供が時間の観念のない永遠の楽園、いわばエデンの園にいることを示す。B. Willey は、大人は子供の永遠性に近づくことができないうえに子供が pre-existent であると思ひ、子供時代に超自然的な資性を与え、想起によって自分に届くなお残っている光に超自然的權威を与えると述べている。¹⁶⁾

かくしてワーズワスが重視しているのは教義としてのプラトンの靈魂先在説そのものではなく、魂がこの世に生まれ落ちてもお神に等しい子供時代なのである。子供はエデンの園から追放される以前のアダムとイブである。

III

これまで述べてきたように、子供は無垢の象徴であり自然の寵児である。ワーズワスの詩において子供はしばしば自然の一部として現われ、天体、花、動物などにたとえられている。だが子供は永遠に無垢であり続けることはできない。人間はいかにして子供の無垢の世界から大人の経験の世界に足を踏み入れるのだろうか。昔の楽園を想起することは、そこが墮罪の場所であったことをも思い出させる。同じように、子供を思うことは、それが遅かれ早かれ楽園か

ら追放される運命にあることを気づかせる。これはパストラルの条件であり、‘Ode’の7, 8連では子供のそのような二面性、つまり innocent かつ guilty な特質が歌われている。これは自然と人工の葛藤と言える。

子供は植物、動物とは異なり人間としての individuality を持っている。それは永遠界 (Nature) に対して他の生物とは異った神秘的な関係を持ち、その完全さは失われる運命にある。これは人間の内包する原罪にほかならない。¹⁷⁾ ‘Nutting’, ‘To a Butterfly’, *The Prelude* の数節には、このような子供の罪の萌芽、自然の破壊者の特質が顕われている。‘To a Butterfly’では無邪気な子供は蝶の狩人であり敵である。‘Nutting’では木の実取りに森へ出かけた子供は聖なる“virgin scene”(21)を犯す libertine に変貌する。そして、清浄な森の“tempting clusters”(20)は子供の墮罪を暗示している。これはエデンの園のりんごの木と同一であり、子供はアダムとイヴに似ている。まだ墮落していない聖所は常に墮落の可能性を秘めている。木の実取りに行った子供が聖なる森を犯して苦痛を覚えたように、子供は己の破壊的な行為を自然に目撃された時罪を意識し始める。この時子供と自然界の調和 (unity of being) は壊れ、彼は疎外感を感じ始め、無垢の世界から経験の世界へ入るのである。

木の実取りの子供が、人間界の人工の産物である“nutting crook”(7)を携えて行って森を汚したように、自然の破壊は人工の介入によってなされる。また、自然の楽園から追放されたアダムとイヴの子孫は人工の世界つまり都市を建設せねばならなかったように、人工は人間の墮罪の産物である。ワーズワスにとって都市は悪徳と墮落を象徴する。‘Michael: A Pastoral Poem’では、リュークは家計を助けるために山の生活を去って都市生活へ入ったが、その結果墮落した。*The Prelude*でも、ケンブリッジやロンドンでワーズワスが知った生活は無秩序で騒々しいものであった。彼はそこで疎外感を覚え、彼の想像力は鈍る。彼は都市ではいわば死人である。

‘Ode’の第7連では、子供¹⁸⁾は新たに現われ出た幸福の中にいる。それはあたかも小さな俳優であるかのように、結婚式、葬式、仕事、恋愛、闘争などの

様々の役割を演じて大人の真似をする。子供にとってこれらの真似事は楽しいものであり、彼の心は好奇心と知識欲に満たされている。だが、アダムとイヴが蛇の誘惑に負け墮罪したのは好奇心と知識欲のためであったように、子供も自らの好奇心のために人工の世界へ落ち込んで行かねばならない。だから、子供を眺める詩人は、それを irony を込めて描写する。子供が次から次へと彼の “humorous stage” (104) をすべての人間で、“palsied Age” (105) に至るまで満たす時、この句には、子供が将来そうなる運命を知らないで楽しんでいるという irony が込められている。子供は今は元気でびちびちしているが、“Age” は「時間」を暗示し、我々は彼の自由が遅かれ早かれ失われることを思う。彼は “with newly-learned art” (93) で大人の社会生活を真似し、無意識に人工の世界に入り始めている。この無意識の人工は人間の原罪を意味している。

第8連は、子供の二面性すなわち人間である以上避けられぬ墮罪の運命を知った詩人の苦悶が歌われている。大人は現実の苦しみの重圧を知っているからこそ、子供が自らその現実へ進んで入り込もうとする時困惑せざるを得ない。子供は “Eye among the blind” (112) と呼びかけられる。“the blind” とは大人のことで、“the prison-house” に閉じ込められているため真理の光が見えない。彼は “the darkness of the grave” (118) の中にいて迷子になっており、光の射し込む出口を見つけるために非常に骨折りをしている。ここでもプラトンの神話を用いられている。“the grave” は死を暗示し、我々人間は mortal だということを痛感させられる。一方、まだ神の光に包まれている子供は、魂が “the prison-house” から自由で広大なため、光に象徴される truths (116) の中にいるのである。こうして真理を読み取り得る子供は哲学者とも言える。

Mighty Prophet! Seer blest!

On whom those truths do rest,

Which we are toiling all our lives to find,

In darkness lost, the darkness of the grave;

(115—118)

神の光の中にいる子供は “eternal” (114) であり “Immortality” (119) の世界にいる。彼は ‘We Are Seven’ で歌われているように死を信じようとなない。¹⁰⁾ 子供はこのように楽園にいるのに、一方では “blindly” (126) に自らの幸福を壊しにかかり、人工の世界へ積極的に入りたがる。だから詩人は irony を込めて子供に問うのである。

Thou little Child, yet glorious in the might
Of heaven-born freedom on thy being's height,
Why with such earnest pains dost thou provoke
The years to bring the inevitable yoke,
Thus blindly with thy blessedness at strife?

(122—126)

“Eye among the blind” であるはずの子供自身が “blindly” に振舞う所に人間の原罪が顕われている。

IV

“celestial light” の行方を探し求めていた詩人はこれまでの思索により、それが牢獄（この世）の中に消えてしまうのだという痛ましい事実に向き合った。ところが彼はそこで嘆いて終らない。第9連では過去から現在そのものへの詩人の意識の転換が見られる。この連では詩人が現実の空しさを悟った後でもなお残されている救いを発見した喜びが歌われている。彼はいかにして喪失感と自己分裂の意識を克服したのだろうか。

O joy! that in our embers
Is something that doth live,
That nature yet remembers

What was so fugitive!

The thought of our past years in me doth breed

Perpetual benediction: (130—135)

「残り火」とは“celestial light”のそれである。人間の心を打ちひしぐ現実の重圧の中からもなお静かに浮かび上ってきて彼の命に息吹きを与え甦えらすもの、それは「子供時代の想起」である。G. Durrent の述べているように、子供時代についての瞑想が、ワーズワスを人間存在の無についてのより明らかな意識へ導いたのであり、彼は人間の可能性への証明として残っている子供時代そのものの想起によって、この無の意識から救われている。²⁰⁾

彼が子供時代に「感謝と賛美の歌」(141)を捧げるのは、今ではどうしようにも失われて手に入らない「喜びと自由、すなわち子供時代の単純な信条」(137—138)のためではなく、彼の周りの世界の絶対的な価値について彼に質問させるものである。

But for those obstinate questionings

Of sense and outward things,

Fallings from us, vanishings;

Blank misgivings of a Creature

Moving about in worlds not realised,

High instincts before which our mortal Nature

Did tremble like a guilty Thing surprised:

(142—148)

ワーズワスは子供の頃、外的事物が外的存在を持っていると考えることができず、それらが彼の“immaterial nature”と離れてはいなくて“inherent”であったことを述べ、そういう状態を“abyss of idealism”と呼んでいる。²¹⁾これは子供の頃彼と外界が調和していたこと、unity of being が保たれていたことを示す。そしてこれが「我々から落ちて消えていくもの、感覚と外的事物に対するしつこい質問」の意味であり、‘Tintern Abbey’の「静か

で至福の気分においては肉体の感覚がなくなり我々は生きている魂となる」(41—46) のと同じことである。また「ある生物についての漠然とした不安…、」と「高尚な本能…、」の具体的な描写は *The Prelude* に見られる。たとえば詩人が少年の頃、ボートを盗んだ時、自然が生き物のように彼を咎めるように思われた。²²⁾ だが彼が大人になった今、これらの出来事を想起する時、「このような否定的行為を契機にして啓示された自然界の超越者の意志に対するおののきも、原体験においてはむしろ戦慄であったものがやがて内面化されていったとき、かえって懐しい精神の糧に浄化されていった」²³⁾ のである。そして、それらの最初の感動と子供時代の想起こそ大人の日々の“the fountain light” (152) であり、“a master light of all our seeing” (153) である。“seeing” とは真実の認識を意味する。この光は昔の純粹無垢な、無意識のうちに子供の属性であった“celestial light”とは異なり、大人の現実の苦悩を通して浄化され内面化された光、思索によって得られた光である。悟りを得た大人の光である。かくして、‘Ode’には、大人の意識の変遷につれて変容してきた common light → celestial light → fountain light の三種類の光があるが、この光の変化は現在→過去→現在というパストラルの型に相当する。

さて我々が「源泉の光」に到達し得たならば、何ものもそれを廃止したり破壊したりはできない。岡三郎氏は、人間の現実には「一定の時間および一定の場所に関係して存在するものとして事物を知覚する」ものと「想起における現実性」の二通りがあり、後者はいかなる時間の暴逆によっても破壊されることのない不懐なる性質を持っていると述べておられる。²⁴⁾ ‘Ode’の“fountain light”とは後者の現実なのであり「目覚めたら決して滅びない真実」(156—157)なのである。このような超時間的現実とは、ワーズワスが *The Prelude* で「われわれ人間存在には、とりわけくっきり目立って、人のいのちをよみがえらせてくれる力をそなえたいくつかの時点があるものだ。…思い切り感謝するのに値いするような、そうした瞬間は、時期からいえばわれわれのごく初期の少年期から始まって至るところに散らばっている。おそらく、とりわけ少年期にこそもっとも著しいのだ。」²⁵⁾ と述べている“spots of time”に相当

する。この真実の光は我々の騒々しい歳月を “the eternal Silence” (156) つまり静なる神の国に照らして “moments” (155) となす。それゆえ我々は神の国である “immortal sea” (164) から遠く隔った “inland” (163) つまり “the prison-house” にいるのだが、心の落ち着いている時には (“in a season of calm weather” (162)), 我々の魂は一瞬にして永遠の海に達して子供達が神の国の岸边で遊ぶのを見ることができ、生命力に溢れた海の轟きを聞くことができる。1—4連では、詩人は肉眼と耳で、すなわち感覚によって自然との一体化を達成できなかったが今や心の目、心の耳で子供時代へ到達し、原初の自然との一体化を達成できた。子供は目そのものであるが、大人は “inward eye”²⁸⁾ を持っている。この “inward eye” は想起を可能にし、想起は G. Durrent も述べているように “imaginative return” なのである。²⁹⁾ ワーズワスが真実を想起によって見出す方法は、彼の創作原理が “emotion recollected in tranquillity”²⁸⁾ であることと関連している。

こうして詩人は想起によって現在と過去、古い自己と新しい自己の統一を達成した。ワーズワスにとって過去というものは現在によって打ち負かされ色あせるものではなく、現在に生命を与えるものなのである。²⁹⁾ 1815年版の ‘Ode’ 以来そのエピタフである “The Child is father of the Man” や、副題の “Intimations Of Immortality From Recollections Of Early Childhood” (イタリックは筆者) の意味もここにある。

かくして詩人は過去へ戻ることによって自己発見をしたのであり、ここに彼の偉大さがうかがえる。詩人は新しい確信を持って現実と直面する。

Then sing, ye Birds, sing sing a joyous song!

And let the young Lambs bound

As to the tabour's sound!

We in thought will join your throng,

Ye that pipe and ye that play,

Ye that through your hearts to-day

Feel the gladness of the May!

(169—175)

ここの描写の内容は第3連と同じではあるが、詩人のそれらに対する態度は、ここでは力に満ち溢れている。大人は自然の歎喜に「想起において」加わる。だが子供は“hearts”による直覚によって自然と統合し、子供と大人の unity of being の達成の仕方は異なっている。が、大人は子供時代の「輝き」(179) が失われても悲しむまい、後に残っているもののうちに生きる力を見出そうと歌う。

We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,
In years that bring the philosophic mind.

(180—187)

“the primal sympathy”とは想起によって達成される子供時代の自然との共感である。大人と自然との間に断絶はない。

And O, ye Fountains, Meadows, Hills and Groves,
Forebode not any severing of our loves!

(188—189)

「人間の苦悩から生ずる慰める思い」とは、現実の苦悩を知ってかえって人生の意味を知りそこから生ずる同胞への愛を意味し、第11連の「我々がそれによって生きている人間的な心」「その優しさ、喜び、恐れ」と同じであり、ワーズワスの人間愛を示している。また ‘Tintern Abbey’ の “The still, sad music of humanity” (91) もこの意味である。「死を通して見る信仰」は、人間の限界を知ることによって得る洞察である。そして最後に「哲学的精神を

もたらす歳月」がある。第8連で、子供は直覚によって真理を読み取り得るために“best Philosopher”と呼ばれた。だが大人は苦悩の歳月を生き、自分の mortality を知ることによって真理を認識するのである。これが「哲学的精神」の意味である。第8連で詩人は歳月が“the inevitable yoke”をもたらすことを嘆いていたが、第10連ではそれが“the philosophic mind”をもたらすことを認識する。この点に“higher innocence”³⁰⁾を得た大人の偉大さがうかがわれる。人間は、無知の純潔の状態にいる子供時代から、避けざるものとして内包する好奇心により墮落し、再び知の純潔を得た大人として再生するのである。

第11連で、詩人は晩年の美と喜びを夕焼けの美しさにたとえて歌い上げる。彼は子供時代の神秘的恍惚感をあきらめ、その代りに静かで落ち着いた喜びを得る。第2連の「地上から去った一つの栄光」は“one delight”に等しく、彼はそれが絶対的であるとは思わない。

I only have relinquished one delight
To live beneath your more habitual sway.

(191—192)

失われた過去は彼には重要なものには違いなかったのだが、それが原形のまま戻って来ない今、大人は現実から逃避するのではなく、人工によって矯正された新しい自然を成就すべきである。次の引用は、人間への愛によって深められた自然への愛を示す。詩人は子供と大人の生を対照しながら人生における各段階の喜びを認めている。

I love the Brooks which down their channels fret,
Even more than I tripped lightly as they;
The innocent brightness of a new-born Day
Is lovely yet;
The Clouds that gather round the setting sun
Do take a sober colouring from an eye

That hath kept watch o'er man's mortality;
 Another race hath been, and other palms are won.

(193—200)

日の出に壮麗な色彩をまっていた雲は、今は落ち着いた色をしている。「もう一つの競争」とは、天上とは別の地上での人間の人生を意味し、詩人はここで人間の死を受け入れている。しかし、死は肉体の死であり魂のそれではない。

Thanks to the human heart by which we live,
 Thanks to its tenderness, its joys, and fears,
 To me the meanest flower that blows can give
 Thoughts that do often lie too deep for tears.

(201—204)

「最もみすぼらしい花」とは多分人間のことであるが、詩人はそれに対して「余りにも深くて涙に余る思い」を抱く。この思いは、また、彼の人間愛を示していよう。

このように‘Ode’は、詩人が現在（大人）から過去（子供）へ戻り、そこで大人と子供、人工と自然の葛藤を経て真なる大人の生き方すなわち矯正された人工を見出している。ワーズワスの‘Ode’はパストラル・ポエムの一型である。

注

- 1) 本稿は1974年1月に提出した修士論文を要約、補筆したものである。
- 2) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and H. Darbishire, 5 vols. (Oxford, at the Clarendon Press, 1947) IV. ‘Ode: Intimations Of Immortality From Recollections Of Early Childhood’ をテキストとして使用。以下 ‘Immortality Ode’ あるいは単に ‘Ode’ と略す。
- 3) *The Poetical Works of William Wordsworth*, II, ‘Lines composed a few miles above Tintern abbey, on revisiting the Banks of the Wye during a Tour. July 13, 1798,’ l. 16. 以下 ‘Tintern Abbey’ と略す。

なお *The Prelude* を除く詩の引用は全て *Poetical Works* による。

- 4) *Wordsworth: The Prelude or Growth Of A Poet's Mind* (Text of 1805), ed. E. de Selincourt. Revised impression (London, Oxford University Press, 1969), Bk. X, l. 485. 以下 *The Prelude* と略す。
- 5) *Ibid.*, ll. 486-7.
- 6) D. Perkins, *The Quest for Permanence* (Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1959), p. 76.
- 7) 「子供時代のバストラル」の例として T. Traherne の 'Wonder', H. Vaughan の 'The Retreat,' Longus の *Daphnis and Chloe*, J. J. Rousseau の *Confessions* と *Reveries of a Solitary Walker*, R. Llewellyn の *How Green Was My Valley* 等が挙げられる。P. V. Marinelli, *Pastoral, The Critical Idiom* ed. J. D. Jump (Methuen 1971) 参照。
- 8) A. Grob 'Wordsworth's *Immortality Ode* and The Search For Identity' (*ELH* xxxii, 1965), p. 32 参照。
- 9) C. Brooks 'Wordsworth and the Paradox of the Imagination' in *The Well Wrought Urn* (A Harvest Book, Harcourt, Brace & World, Inc: New York, 1947), p. 126.
- 10) *Ibid.*, p. 128.
- 11) "a thought of grief" の内容については (1)ワーズワスの肉親の死, あるいは (2)時々彼を訪れた神経症の徴候を指す, の二つの意見がある。
- 12) "A timely utterance" の指す内容については岡三郎氏が『凝視と夢想: ワーズワス論』の「オード論」において詳しく述べておられる。この語句が指す内容については (1) the Rainbow poem (Garrod, Bowra) (2) 'Resolution and Independence' (Trilling, Bateson) (3) 'Ode' の第1, 2連 (W. T. Webb, E. D. Hirsh.), (4) 'Ode' の第3連に歌われている自然の喜ばしい声 (G. H. Hartman) (5) 'To The Cuckoo' の小鳥の歌 (原一郎) (6) *The Prelude* の ll. 1-54. (岡三郎) の6通りの説がある。『凝視と夢想』, pp. 314-315. 参照。
- 13) 金田真澄『ワーズワスの詩の変遷: ユーピトア喪失の過程』(北星堂, 1972), p. 318.
- 14) *Poetical Works*, IV, p. 464.
- 15) *Ibid.*, p. 464.
- 16) B. Willey, " 'Nature' in Wordsworth" in *The Eighteenth Century Background* (Chatto & Windus, London, 1965), pp. 285-286.
- 17) D. Ferry, *The Limits of Mortality* (Wesleyan University Press, Middletown, Connecticut, 1959), pp. 41-43.
- 18) 第7連で登場する子供は S. T. Coleridge の息子の H. Coleridge であると

いう説があるが、‘Ode’ は人間すべてにかかわるテーマを歌っているので、この子供もすべての子供の代表であると考えたほうがよいと思う。

- 19) ‘Ode’ の1807年と1815年の版では、次の3行が ll. 121-122 の間に加わっていて、子供が死を知らないことが歌われている。
- To whom the grave
Is but a lonely bed without the sense or sight
Of day or the warm light,
A place of thought where we in waiting lie;
- 20) G. Durrent, *William Wordsworth* (Cambridge at the University Press, 1970), p.104.
- 21) *Poetical Works*, IV, pp.463-464.
- 22) *The Prelude*, Bk. I, ll. 406-412.
- 23) 岡三郎『癡視と夢想：ワーズワス論』（国文社，1971），p.278.
- 24) *Ibid.*, p.280.
- 25) *The Prelude*, Bk. XI, ll. 258-279.
- 26) “I wandered lonely as a cloud,” l. 21. 参照。
- 27) G. Durrent, *William Wordsworth*, p.104.
- 28) *Preface to the Second Edition of Lyrical Ballads* (1800), 矢野禾積注訳（研究社，小英文叢書，1970），p.17.
- 29) J. Benziger, “‘Tintern Abbey’ Revisited” in *Wordsworth: Lyrical Ballads*, ed. A. R. Jones & W. Tydeman (Macmillan, 1972), p.240.
- 30) Marinelli, *Pastoral*, p.63.